

(正統化)の3つのサブシステムからなるものとして定式化した。サブシステム間の相互作用が機能不全に陥った「危機管理の危機」と彼が呼ぶ状況は、紛争発生の構造的要因とされている。後にふれる「ボランティアが抱える矛盾」は、こうした構造的制約のもとで創り出される。

- 4) この点については、Offe (1996) を参照。
- 5) この部分は、中野 (1999) の議論に依拠している。
- 6) グリーンピースについては、Wapner (1996) を参照。
- 7) こうした「動員の技術」の詳細については、Oliver and Marwell (1992) を参照。

実践報告1：コミュニティとボランティア

脇町の「ふれあいいきいきサロン」づくりから

徳島県脇町 梶浦 豊子

(前・脇町社会福祉協議会事務局長)

◎脇町の概況

脇町の概況ですが、江原、岩倉、脇町の3町が合併し45年が経過しました。脇町の面積のうち73%が森林、山地で占められています。山地の町ですが緑とかいろんな特色をいかしています。たとえば江戸時代から明治時代にかけて阿波藍の集産地として栄えた伝統的な、勇壮なたたずまいの町並みが残っております。そういったものをうだつの町並みとして観光の面におきましても全国発信しています。

そのような山間地のまちで、取り組んで参りました福祉サービスを2つ程挙げます。

※脇町の数値概況

面積 111,09km²
世帯 6138世帯
人口 18,088人
高齢化率 24.37%

地域とボランティアの未来

*65歳以上老人人口

昭	40年	2002人	9.98%
昭	50年	2509人	13.19%
昭	60年	2902人	15.01%
平	7年	4056人	21.27%
平	12年	4300人	24.37%

◎ボランティア・スクール

今、脇町の人口が1万8千人、世帯数が6千、高齢化率が24%と超高齢化社会に突入しています。脇町社会福祉協議会では住民が何を希望しているか、どのようなニーズを持っているかということに注目し、常に住民に視点をあてた事業を展開してきました。そういうふうななかで県下の他の市町村に先駆けて、まだ住民の方たちがボランティアとか社会福祉協議会の存在すら認識の薄い、昭和49年に、ボランティアスクールをやってみないかという話がでました。私たち社協の職員も勉強していかなければいけないなと思っていましたので、手探りのなかで県社協のご協力をいただきながらボランティアスクールを開講しました。「ボランティアとは何か」から始まりまして、施設への訪問などが主な取り組みでした。受講者は、婦人会の会員の方、民生委員さん、あと一般の方とかでした。当時ボランティアということには馴染みが薄かったわけですが、まだまだ近隣相互の意識、隣同士の助け合いの気持ちはありました。特に山間部なので農作業の助け合い、珍しいものができたらお裾分けするなどの相互扶助は残っていました。いまでもうだつの町並みのような伝統的な、後世に伝え残していかなければならないものにつきましては、その地域の方はもちろん町全体で取り組む住民の協力関係は残っています。

スクールを開催いたしまして、ボランティアとは通常の身近なところでやれるものから気負わないでやるんだということを学びました。いまでも冠婚葬祭とか、そういうものを通して助け合いが行われていますが、スクールを受講したメンバーの間から新しい活動への意見が出てきました。

ある日、憩いの部屋でお風呂に入って将棋とか踊りの稽古をしている人達がお昼にうどんをとって食べているのを見ていて、そういうふうなお年寄りの方たちに月1回でも2回でもバランスの取れた食事を作って一緒に食べたかどうかという話が持ち上がりました。その当時、私たちもそういう気持ちがありましたので願ったりかなったりだったのですが、それを始めるにつまましていろんな問題がでてきたのです。

まず1つには台所の問題、2つめには食器の問題、3つ目にはどれだけのボランティアが関わってくれるか、という問題、4つ目にはそれを受けていただける当事者、5つめには経費の問題、そういう風な問題に突き当たった訳です。

当時、私たちは公民館に社協の窓口を構えていましたので、台所といっても宿直の方の台所しかなく、もちろん食器なんかもありません。そういうふうな流し台1つからのスタートだったのですが、食事サービスに必要な器具とか備品、そういう物はボランティアの方とか、地域の福祉委員さんをお願いして、私たちで集めてきました。ボランティアに自発的に一緒にやろうという仲間の方たちばかり、5人ぐらいの方でのスタートでした。すべて強制的にお願いするのではなくて自主的、自発的に「私もやろうかな」という方たちでした。

食事に参加してくださるメンバーの方も、憩いの部屋に来て、お風呂に入ると、踊りとか将棋をしている方に声をかけまして、「これから月に1回から2回、食事を作ろうと思うんだけど、食事会に参加して食べてくれるで」と呼びかけました。当時うどんが1杯250円から300円ぐらいしていた時期です。思い切って最初のスタートから会費制にしました。1食250円です。会費制にしたことで経費の面は全部クリアできたかなと思っています。今考えると会費制にしたのが27年間も、長い間続けられた秘訣だと思っていますし、町の補助金に頼っていますと、町の補助金が終わった時にその事業も終わってしまう。それと社会的資源、人的資源に恵まれていたことが、大きなメリットだったと思い返しています。リーダーの方が料理の先生で、ボランティア自身も料理の勉強になるし、ボランティアもできるしと、一石二鳥で参加し

てくれました。

◎会費制の食事会のスタート

このようにとにかく参加する高齢者の方とボランティアの方が狭い会場で話し合いながら進めていくうちに、参加者も会場の準備とか配膳の手伝い、また後かたづけ、そういうような自分でできることは自分たちがしますという風に前向きに取り組んでくれました。また食後の楽しいアトラクションの時間につきましても、参加者の中にユニークなおじちゃんがおりまして進んでその役割を担ってくれました。そういったことでいつもマンネリ化しないように心がけてきました。また会費制ですので誰にも気兼ねなく、参加する方も堂々と参加してくれるようになりまして、いつの間にか7、8人の参加者から20人30人に増え、今では100人近いかたが参加してくれています。

このように問題を1つ1つクリアーしてとにかく私たちがやるんだというかたちで、前向きに取り組んできたことが1つの大きな成果につながったのではなかったかと思っています。これがいま住民のなかからたち上がりました「いきいきサロン」という活動のおおもとの始まりといえるだろうと思います。

◎協町社協の在宅支援の3本柱

次に在宅への取り組みですが、協町では給食サービスをきっかけにいたしまして、昭和62年に移動入浴サービス、昭和63年におじいちゃんの料理教室を始めました。

高齢化社会の問題は女性の問題といわれています。いま全国に100歳以上の方が1万1千人あまり、徳島県にも25人いらっしゃるそうですが、その8割が女性の方です。昔も今も介護の分野は女性の方に重い負担がかかっている。特に郡部ほど女性に頼る意識が強い傾向がある。その負担を少しでも軽減できたらという思いで移動入浴サービスをボランティアの方とか、看護婦さん、保健婦さん等の協力を得ながら進めています。

おじいちゃんの料理教室につきましても、昔は男子厨房に入らずというこ

とで、男子の方が台所で料理していると奥さんにしかられた時代だったかと思いますが、今では進んで男子厨房に入ろうということで万が一に備えて料理が出来るように、そうすることによって日頃家にこもりがちなおじいちゃん達を外に誘い出し、交流の場づくりとしました。

このように給食サービス、移動入浴サービス、おじいちゃんの料理教室を在宅3本柱と掲げまして、常に住民との接点を持つよう進めております。

このような接点を持てば持つほどいろいろな課題とかニーズが出てきますし、新たなニーズの再発見がなされます。福祉サービスを必要とする方たちに、公平にまた公正にサービスが行き渡るよう配慮する必要があります。しかしまだまだすべてのそのような方にサービス保障ができていないのが実状です。

なお、さいわいなことに脇町では平成8年に「ふれあいのまち作り」事業の指定を受けまして、住民参加のまち作りを進めてまいりました。その事業の中で、まず一つに住民との対話を実施しました。脇町には115の町内会がありますけれども、住民の方たちと直接膝を交えて話す機会を持とうということで、平成10年から全町、夜間とか土・日を返上しまして私たち社協のスタッフは回ってまいりました。平成12年に2回目を回りましたが、何よりも直接顔を見て話をするには、いかに立派なパンフレットであっても、パンフレットを配布するよりも効果があったと思います。特に山間部は若い人達の仕事がない関係上高齢者の方がほとんどです。こんな寂しい話も回っていったときに飛び出しました。ある70歳代後半の男性が「もう10年先になると我々の部落では人が居なくなる」と。実際にある集落では昔は20戸程の集落だったのが1戸減り、また1戸減り、みな平坦部に移り住んで今では3戸になっています。そのうち2戸はいま平坦部に新築中で、3月にはその家が完成します。そうすると、あと1戸だけ残されて、その1戸の家族構成も年老いた兄弟のかたたちです。山深い中に1戸だけ離れてしまいます。今年のように雪の多い、寒い冬は訪れてくれるひとも少ない。私たちも民生委員さん、福祉委員さんに相談をかけて、冬の間だけでもケアハウスとか子供さんの家の方に行ったらどうだろうか、そういう話を進めてもらえないかと

持ちかけたのですが、なかなか本人がうんといわない。住み慣れた地域から離れたがらない、そういうことになってきています。

1月に別の地域のいきいきサロンに参加したときに、この1戸だけになる集落からお嫁さんに来ている70歳代女性が言っていました。「ほんにさみしい話じゃ。自分の生まれた実家が町中に出してしまうと、お墓まいりに行ってもお茶をくれる人も居ない。寂しい限りじゃ」と話をされていた。この方の気持ちがよく分かります。そういう風な状態で脇町もどんどんと過疎が進んでいるのです。

◎いきいきサロンのスタート

このように今回の活動を通して、ニーズを汲み上げて、地域で支援を必要とする人たちにサービスを提供してきましたが、その過程のなかで、これまでもこれからも必要なのは、小地域単位での助け合い、だと思いました。昔は隣組というふうなことで、声かけとか見回りが近隣同士で行われていましたが、いまでは隣同士が疎遠になっている。簡単ではないかも知れませんが、やはりこれからも小地域でそういう風な助け合いの体制づくりをしていくことが必要だと思われました。

それで、幸い脇町には公共的な集会所が74カ所あるのですが、その集会所を活動の拠点にしたふれあい活動を試みようと思いました。これがふれあいいきいきサロンと小地域支援ネットワークの取り組みの始まりです。この活動の背景には、長年培ってまいりました給食サービスとか、いろいろな在宅サービスの仕掛けがありました。それと、時間をかけて町内を回りまして住民との対話を行ってきた成果の側面もありました。けれども、もちろん、なんと言いましてもやはり助け合いを受け入れる住民性、地域性、つまり、住民の皆さんの協力のたまものであるという側面がもっとも強いと思っています。

いま現在74カ所のうち34カ所の集会所で活動が展開されていますが、将来的には74カ所全部での活動を目指しています。活動状況につきましては、1つの地域の特性に合わせて、自分たちの地域は自分たちの手でやるん

だと言うことで、まずふれあいの場づくりというところから取り組んでいてもらいました。こういう活動が月1回、1回から2回、3回・・・と活動の回数を自然と増やしていくのがよいと思いました。そういうなかで、食事をはさんでいろんなおしゃべりをするうちにその地域でのニーズも見えてくるでしょうし、参加していないお年寄りの方がありましたら、「今日は参加していないな、あそこのおばあちゃん、おじいちゃんどうしたんだらうかな」というふうに自然とその方達の安否の確認も出来るようになってまいります。それで、まずは集まって食事する、ふれあいの活動から取り組みました。

ボランティアにつきましても、ボランティアの方が仕事を持って忙しいという地域におきましては「老人パワー」ということで、当事者で立ち上げたサロンもあります。サロンの経費につきましても給食サービスが当初からそれぞれの会費制にしていたことをうけて、サロンサロンの特性に合わせて、参加する方には300円から500円の幅でみなさんが持ち寄ってくださいということで当初から経費の補助はしていません。やはりこれからは与える福祉ではない、一緒に参加する福祉、ということだと思います。ボランティアにつきましても、「してあげるんだよ」というボランティアではなくて当事者とともに話し合いを進めながら、納得のいくボランティア活動、納得のいく受け手の活動、そういうようなかたちものにしていく必要があるのではないかと思います。

身近なところでの下駄履きの、誰もが出入り自由で、窮屈な規則とか規約とか、そういうものに縛られない活動でありまして、上からの押しつけのサービスではなくて本当に当事者である参加者とともに内容を決めていく活動。また、ボランティアの方が、自分がサービスを受ける立場になったときにどうするか、考えながらする活動。どちらにとっても、利用する人とボランティアと、それぞれが自身の学習の場としてくれれば、よいな、とおもって、いきいきサロンをやっています。

◎農山村部でのボランティア支援のあり方と私の取り組み

ボランティアの自主性、自発性の尊重は言うまでもありませんが、農山村

地域とボランティアの未来

部で、ボランティア活動を推進していく場合、それを意図的に立ち上げていくのであれば、そして又、継続して地域のケアの対策の一環とするのであれば、側面的な支援は必要だと思います。協町におきましては、まず第一にボランティア保険への加入援助。2つ目に活動拠点への支援といたしまして冷暖房器具の設置。それからボランティアの方に、ボランティアをしていることが住民の方に直ぐにわかるようなユニホームの支給、これらのことを社協のほうでやりました。それから昭和49年からの給食サービスに関しての、そのメニューを集大成した献立表の冊子を作成しました。それと、原則的に助成はしませんよといいいながらも、やはり立ち上げ時には経費が特別に必要になりますので、立ち上げ時に限り補助金を出しています。これらの支援対策が相乗効果を生んだ結果、現在はそれぞれの地域で生き生きとした活動が展開されています。

いまは殆どのサロンが、高齢者のふれあいの活動になっていますが、将来的にはやはり障害者の方とか、地域で子育てに悩んでいるお母さん方、そういう方たちを巻き込んでの、ふれあいいきいきサロンの活動もやりたい、そういう活動に輪が広がっていけば良いなと思っています。

私自身は、昨年12月に社会福祉協議会を退職しまして、これからこういう風な形でボランティアというものに少しずつでも入って行ければいいなと思っています。いろんなニーズがあがっています。そのニーズにいまはまだまだ行政機能というものが十分に対応できていません。そういうニーズを必要とする方たちにボランティアをしていければと思っています。